

HOT TOPIC



山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) 「国際シンポジウム2017」を開催!

2017年3月14日(火)に、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)国際シンポジウム2017“Creating the Future of Faculty Development Across the Border”が60名の参加者を集め、YIC Studio 2階講堂にて開催されました。本シンポジウムは、日本高等教育学会、大学教育学会の後援を受けて開催されました。

冒頭、福田 隆真 山口大学理事・副学長(教育学生担当)より開会挨拶があり、基調講演1では、河本 達毅 文部科学省高等教育局大学振興課 大学改革推進室 改革支援第二係長より、「高大接続改革と大学教育再生加速プログラム」というタイトルで、高大接続改革と大学教育再生加速プログラムの背景と目的、現状の課題等が説明されました。続く基調講演2では、沖 裕貴 立命館大学 教育開発推進機構教授より、「FDの過去、現在、未来 ~私たちは何をしてきて、どこに向かっているのか?~」というタイトルで、日本の高等教育の文脈におけるFD(Faculty Development)の位置づけ、定義、課題、将来の展望が論じられ、諸外国との比較が簡潔に述べられました。

次に、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授より、「山口大学AP事業が目指す『学びの好循環』と教授学習観の深化」、大関 智史 宮崎国際大学APアセスメント・オフィサー(助教)より、「宮崎国際大学のグローバル教育とAP事業への取組」というタイトルで、山口大学と宮崎国際大学のAPの成果報告がそれぞれ述べられました。

特別講演では、メアリー・ディーン・ソルチネッリ(Senior Fellow, Institute for Teaching Excellence & Faculty Development, UMASS)より、“Creating the Future of Faculty Development Across the Border” というタイトルで、FDの定義の再確認や歴史、米国・カナダにおけるFD担当者向けの大規模調査の結果などが報告されるとともに、FDをエビデンスベースで進める必要性が強調されました。

後半のグローバル・ワークショップでは、「10年後のFDの姿を展望する~日米FD比較調査を通じたダイアローグ~」というタイトルで、まずアンドレア・L・ビーチ(Professor of Higher Education Leadership, Western Michigan University)と山崎 慎一 桜美林大学 グローバル・コミュニケーション学群助教により、日米の比較調査の結果報告が述べられました。その後、これまでの発表内容を踏まえた上で、参加者が4人1組のグループを構成し、「日米のFDの違いに関する気づき、疑問」と「これからの日本のFDの行方」を議論するというワークショップが行われました。参加者からは、米国と比較して日本はFDのweb活用やマイノリティへの配慮が進んでいないことが印象的であったということや、エビデンスベースを強調するあまり、定量化出来ないことに関する議論がおざなりになってしまう危険性などが語られました。



山口大学・大学教育再生加速プログラム

YU-AP News

Yamaguchi University Acceleration Program

Vol.4
2018年3月号

YU-AP News Vol.4

Yamaguchi University Acceleration Program

教育は加速する。

Contents

- 巻頭言 …… 2
- AP事業実績の概要 …… 2
- テーマⅠの実績 …… 4
- テーマⅡの実績 …… 5
- イベント紹介 …… 6
- 編集後記 …… 7
- HOT TOPIC …… 8



巻頭言



山口大学 副学長
福田 隆眞

山口大学は2015年に創基200周年を迎え、新学部の新設や全学的な組織再編を鋭意進めています。なかでも文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択(2014年度)を受けて、積極的に大学教育改革に取り組んでいます。山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、テーマI「アクティブ・ラーニング」、テーマII「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献することを目指しており着実に成果を挙げています。

2015年度より導入されたALポイント認定制度では、当該授業でどの程度アクティブ・ラーニングの活動をしているのか、シラバスに明示されることとなりました。今年度(2017年度)には、アクティブ・ラーニング型授業の割合が学士課程教育全体で70%を超えるまでに広がりを見せています。

また、ALポイントや学生の授業満足度をもとに選定するアクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度も2年目を迎え、今年度は5科目・14名を選定し表彰を行いました。また、今年度は、昨年度にALベストティーチャー表彰を受けた教員による模擬授業を通したFD・SDワークショップを開催し、大好評となりました。ALベストティーチャーによる授業実践を広く共有することで、全学的な教育改善の議論や組織文化の醸成に資することを目指しています。

さらに、YU CoB CuS、学修到達度調査、学修行動調査といった複数の指標を用いた直接評価・間接評価統合型の学修成果可視化モデルの構築に取り組んでいます。そのモデルの一部はすでに修学支援システムに取り入れられており、学生や教員が一目で今の到達状況を把握できるような仕組みになっています。今年度からは、学生に対する修学指導を強化するため、事務職員を対象としたラーニング・アドバイザー養成講座の実施にも取り組み、学生の成長を支援する体制を一層充実していきたいと思っています。

山口大学・大学教育再生加速プログラムは、事業4年目となり、中間評価を経て、いよいよ事業も後半期に突入します。事業成果を積極的に情報発信するため、「YU-AP News Vol.4」を発刊いたします。今後とも、皆様からの深甚なるご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

AP事業 実績の概要



第2回 アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャー決定!

共通教育におけるアクティブ・ラーニング(以下、AL)の授業実践に顕著な成果をあげた教員を表彰する「ALベストティーチャー」の第2回受賞者14名が選出されました。ALベストティーチャー表彰制度は、本学が2014年度に採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)の一環として2016年度に制定された制度で、シラバスのALポイント、学生授業評価、成績評価分布などを指標に審査し、受賞者を決定しています。その第2回受賞者の表彰式が12月5日(火)の部局長会議の冒頭で行われました。

表彰式では、岡 正朗 学長より、「ALに先生方が積極的に取り組み、成果を出していただいたことを大変嬉しく思う。これからも山口大学の教育力向上のため、ご協力いただきたい。」との言葉が贈られ、出席した10名の教員に1人ずつ表彰状が手渡されました。

なお、表彰式に先立ち、岡 学長と表彰者との間で懇談会が開催されました。懇談では、近年の学生の授業を受ける態度の変化や実験科目における授業時の工夫、外国人留学生の成長の様子、学生の表彰方法の改善提案など、教育活動の改善に向け様々な視点から意見交換がなされました。



大好評! アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャーによる 模擬授業型ワークショップ

2017年9月26日(火)に、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)「アクティブ・ラーニング(AL) ベストティーチャー表彰記念 FD・SDワークショップ ～第1回ALベストティーチャーによる模擬授業～」が、学内外から合計52名の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟15番教室(アクティブ・ラーニング教室)にて開催されました。

模擬授業Part1では、上田 真寿美 本学国際総合科学部教授より、「深い学びにつなげるアクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』」と題して、アクティブ・ラーニング型授業「山口と世界」初回の模擬授業を行っていただきました。授業のオリエンテーション時における学生との関係づくりを大切にし、受講生全員の名前を読み上げて出席を確認した後、グループメンバー同士の自己紹介やチームづくりのポイントを説明されました。このほか、授業の到達目標に関連して「山口と世界」コモンルーブリックの観念の説明や、グループごとの活動

記録に対するフィードバック、さらには、中間発表や最終発表の評価のあり方などについて紹介がありました。

模擬授業Part2では、尊田 望 本学非常勤講師より、「『英語が嫌い』から『英語が楽しい』に変えるアクティブ・ラーニング」と題して、アクティブ・ラーニング型授業「English Speaking」導入部分の模擬授業を行っていただきました。自己紹介演習、語彙ゲーム、Q&A演習、コミュニケーションゲームと、タイマーによる制限時間内のワークを小刻みに行いながら、教材を通して知っている単語を増やし、実際に英語を使って分かるようになる楽しさを実感させる授業を参加者一同が体感し、教室全体が活気ある雰囲気になっていきました。

後半の質疑応答では、参加者から積極的に質問があり、実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという熱い思いが伝わってくるワークショップとなりました。



2016年度外部評価を活かした事業展開

本事業では、事業の進捗状況や補助金の執行状況を評価するために、事業内容に精通した大学関係者、高等学校関係者、企業関係者によって構成される「外部評価委員会」を設置しています。

特に、2015年度からは、内部評価と外部評価を連携させながら、評価体制を強化・充実しました。外部評価で受けた講評やコメントを重視し、翌年度の事業計画に最大限活用するPDCAサイクルを構築しています。具体的には、外部評価を受けた翌年度最初のYU-AP事業推進委員会において、外部評価で受けた講評やコメントに関する対応策を作成し、具体的な活動計画を立案するようにしました。このことにより、事業取組の改善・充実に積極的に取り組むことができるように

なり、次回の外部評価委員会における事業報告項目が明確化されることとなりました。外部評価を活かしたPDCAサイクルを軸とすることで、事業取組の改善点が明確化し、かつ、改善方策の方向性が具体化され、事業全体の進捗状況が一層可視化されました。

2017年3月23日(木)に開催された「2016年度外部評価委員会」では、事業取組については、計画が緻密で着実に進められていることがわかるので、全体的にすばらしい取組という総括のほか、ALベストティーチャー表彰を通じた組織文化の醸成やアクティブ・ラーニングを通じた学生の成長の実態把握、高等学校・地域・企業を交えたアクティブ・ラーニングに関する交流の場づくりなどに期待するとのコメントがありました。

テーマIの実績

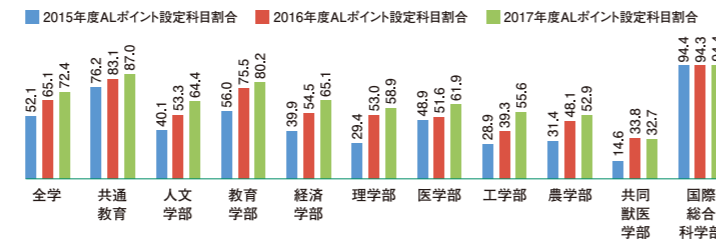
AL(アクティブ・ラーニング)ポイント認定制度

ALポイント認定制度が導入されて3年目を迎えました。これまで3年間の「ALポイント設定科目の割合」の経年変化を授業開講部門別に見てみると、初年度と比べて約2倍となった理学部や工学部をはじめ、国際総合科学部・共通教育・教育学部のように80%を超える部門があるなど、全学的に増加傾向にあることがグラフから見てとれます。

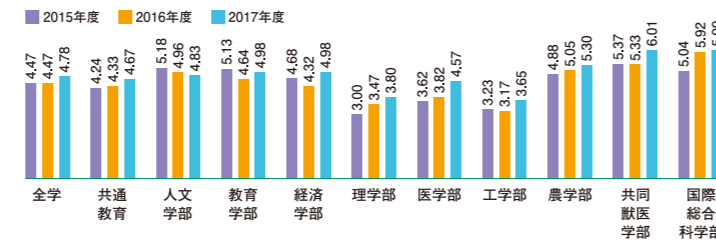
また、「ALポイント設定科目における平均ALポイント」の経年変化を授業開講部門別に見てみると、当初2年間はさほど変化がありませんでしたが、3年目の2017年度に大きく伸びた部門が多く、全学では4.78という値になっています。

以上のように、本学におけるALの定義が少しずつ浸透し、AL型授業が着実に増加していることがうかがえます。今後は、学生の獲得ALポイントの内訳を確認しながら、それらの値と学修行動や知識・技能の獲得との間にどのような関係があるかといった分析を進め、学生の主体的な学びに寄与するALの検証を進めていきます。

「ALポイント設定科目の割合」の経年変化



「ALポイント設定科目における平均ALポイント」の経年変化



SLP(スチューデント・リーダー・プログラム)の取組

ALを前提とした正課外教育プログラムとして、2014年度から始めたSLPは、【ラーニング・スキル開発】【キャリア開発】【学生企画】の3区分で、様々なテーマを取り上げながら、これまで20回以上開催されてきました。

2017年度は、【ラーニング・スキル開発】計4回、【キャリア開発】計1回開催され、全体で150名近くの学生が参加し、満足度の高い評価を得ました。

【ラーニング・スキル開発】では、学生が主体的かつ能動的に学ぶための学びの手法を習得することを目的に、ライティングやプレゼンテーションに関する基礎スキルをレクチャーし、ミニワークを行いました。特に、ライティングスキル養成講座は、2016年度に実施した「初年次学生の学習意識調査」の結果において、学生から要望が強かったことを踏まえ企画しました。

【キャリア開発】では、学生のキャリア意識を醸成することを目的として、大学職員の仕事の魅力について、山口大学出身の職員が話題提供しました。このメニューは毎年好評で、今や定番となっています。



- 第5・6回SLP【ラーニング・スキル開発】7月開催
「ライティング入門講座 ～レポートの書き方の基本的な作法とコツをつかめ!～」
(学生・教職員70名参加)
- 第7・8回SLP【ラーニング・スキル開発】11月開催
「プレゼンテーション入門講座 ～プレゼンテーションの基本的な作法とコツをつかめ!～」
(学生・教職員25名参加)
- 第2回SLP【キャリア開発】5月開催
「ぶち教えちゃる! 大学職員の仕事 - 大学職員の先輩に聞いてみよう -」
(学生・教職員43名参加)



【ALポイント】 Active Learning Point

AL(アクティブ・ラーニング)ポイントとは、ALの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」に設定されているAL度から算出されます。各科目におけるALポイントをシラバスに明示し、履修の参考にすることで、アクティブ・ラーニングを通じた学生の主体的な学びを促進することを趣旨としています。

テーマIIの実績

直接評価・間接評価統合分析モデル

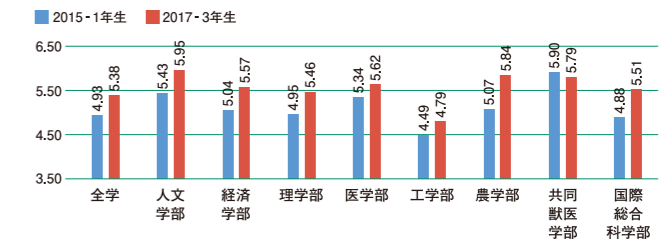
2015・2016年度の2年間にわたり、学部1年生と学部3年生の一部を対象として、学修到達度調査(PROGテスト)と学修行動調査アンケート(JSAAP)を行ってきました。

2017年度については、調査対象者に変更はありませんが、これまでと同様、学修到達度調査(PROGテスト)を継続して実施するとともに、新たに山口大学オリジナルの学修行動調査を実施することとなりました。

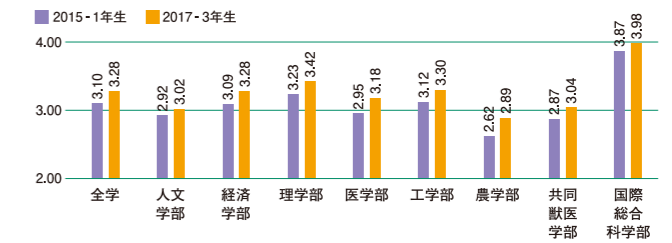
右のグラフは、学修到達度調査(PROGテスト)の経年変化を追った最初の学年である2017年度の学部3年生(2015年度の学部1年生)の結果の中から、リテラシー総合評価とコンピテンシー総合評価の平均値がどのくらい伸びたかを学部別に集計したものです(評価値の最小値は1、最大値は7、全国の大学生平均は3~4程度、教育学部は2015年度のデータがないため表示していません)。

今後は、成績をはじめとする直接評価データと、学修到達度調査(PROGテスト)や学修行動調査といった間接評価データとの関係性について分析を進めていく予定です。

「リテラシー総合評価」の経年変化



「コンピテンシー総合評価」の経年変化



学修指導調査とラーニング・アドバイザー養成

YU-AP事業では「学びの好循環」をキーコンセプトに、学生の主体的な学びを起点として学修成果を可視化するとともに、可視化された学修成果に基づく学修指導により、学生自らがさらに成長していくことを目指しています。既に、ALポイント認定制度の導入、新修学支援システム(eYUSDL)の構築などを進めてきましたが、これらの学修環境の整備を基礎に、学生自らの振り返りとさらなる成長を促す学修指導の改善・充実を次の課題として掲げていました。

2017年度前半期に開催された大学教育再生加速プログラム事業推進委員会(YU-AP委員会)において、各学部における学修指導調査の実施を提案し、その結果をとりまとめました。各学部の学科(またはコース・選修)における定期的な学修指導について、学年ごとの学修指導の時期、担当者、方法を具体的に把握することを通して、可視化された学修成果に基づく学修指導の充実や、ラーニング・アドバイザー制度の導入などの参考資料として活かすこととしました。

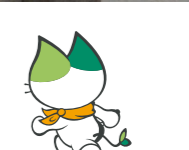
さらに、事務職員を対象としたラーニング・アドバイザー養成講座を新たに創設しました。今年度は、2017年11月~2018年1月にかけて3回にわたって開催しました。計23名が受講し、このうち、全3回の講座を修了した8名に「ラーニング・アドバイザー認定証」が授与されました。

(注):「学修指導」とは、学修相談、教育課程、履修方法など学修上の各種指導を指します。



【直接評価と間接評価】 Direct Assessment & Indirect Assessment

直接評価とは、学生の知識や技能などの表出から学修成果を直接的に評価すること(何ができるか)です。テストやレポート、卒業研究などによる評価がこれに該当します。一方、間接評価とは、学修行動や学修成果についての学生の自己報告から学修成果を間接的に評価すること(何ができているか)です。学生調査などのアンケート項目などによる評価がこれに該当します。



Event

【イベント紹介】

山口大学主催で「学生サミット2017春」を開催!

2017年3月2日(木)・3日(金)に、「学生FDサミット」を山口大学で誘致開催しました。山口大学で開催された今回は、「Borderless Campus ～学びのフィールドはどこにある?～」をテーマに、学びの多様性に焦点を当て、「発見し・はぐくみ・かたちにする」という活動を通して、その大学オリジナルな

学生FDを考えることを目指しました。山口大学 共通教育棟(吉田キャンパス)にて、学内外からの参加者258名を集めて行われました。

1日目は、奥田 真也(経済学部4年生(当時)・学生FDサミット2017春 実行委員会代表)より開会宣言が行われました。次に、岡



正朗 山口大学長及び学生FDの第一人者である元立命館大学教授 木野 茂氏より開会挨拶がありました。その後、学生FD第一世代トーク「とどけ、熱き心」、午後には分科会セッション「山大 春の陣」と題して、下関市立大学・岡山理科大学・山口大学3大学の学生グループによる分科会が行われ、その後、体育館に移動して、「教室内学習」派と「教室外学習」派に分かれて、参加者一同で綱引きを行いました。

2日目は、グループワークセッション「学生FDサミットのビジョンをデザインしよう!」と題して、どんな学生FDサミットに参加したいのか、作り上げていくのか、そのビジョンをデザインするというグループワークを行いました。

クロージングセッションでは、各グループが考えたビジョンをもとに、学生FDサミットのエンブレム(上図)を披露するというサプライズ演出があり、今後の学生FDサミットにつながる貴重な機会となりました。



ループリックを活用した学修評価ワークショップ

2017年11月10日(金)に、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)&医学教育センター共同企画 FD・SDワークショップ「ループリックを活用した学修評価ワークショップ ～ループリックの観点と記述に着目して～」が、学内外から合計41名の参加者を集めて、本学吉田キャンパス共通教育棟26番教室(アクティブ・ラーニング教室)にて開催されました。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環としての実施であるとともに、医学教育センターとの初めての共同企画での実施となりました。

導入レクチャーでは、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師より、「ループリックによる学修評価を知る、活かす」と題して、ループリックに関する基礎知識を学びました。

事例紹介では、藤宮 龍也 山口大学大学院医学系研究科教授より、「医学科チュートリアル教育におけるループリック活用実践」と題して、2017年3月の医学教育モデルコア・カリキュラムの改訂に伴う医学教育改革などを紹介しながら、医学科チュートリアル教育においてループリックを活用した成績評価を行っている複数科目の実践事例が紹介されました。

後半のワークショップ「ループリックの観点や記述を考える」では、俣野 秀典 高知大学地域協働学部講師のファシリテーションにより、ループリックに関する詳細や作成上の注意点に関する説明があり、その後、いくつかの参考事例を紹介しながら、レポートを評価する際の観点やレベル毎の評価基準の記入を行うワークに取り組みました。

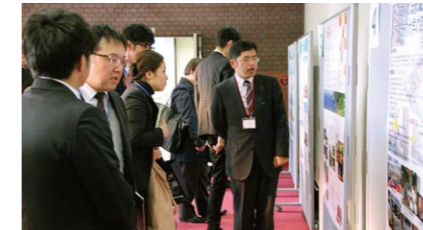


大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち

2017年12月18日(月)に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち「今、改めて考える“教職協働”～地方大学の魅力発信と大学間連携～」を、県内大学はもとより、北は北海道から南は長崎からの参加を含め、100名を超える参加者を集め、吉田キャンパスにて開催しました。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶があり、2017年度からSD(スタッフ・ディベロップメント)の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、従来のSDセミナーを大学マネジメントセミナーと改称して開催する趣旨が述べられました。

基調講演では、樋口 浩朗 山形大学米沢キャンパス事務部研究支援課・副課長より



「東の山大でプレイフル! ～職種と組織を超えた協働が日本を救う～」、吉村 充功 日本文理大学工学部教授・学長室長より「教職協働による地域に信頼される大学づくり」と題して講演がありました。

後半では、ポスター発表での気づき・感想・意見について「教職協働」「地方大学の魅力発信」「大学間連携」という3つのキーワードを絡めながら、グループ対話を行いました。クロージングでは、ポスター発表の表彰式があり、最優秀ポスター賞:徳山大学「徳山大学ダブルアドバイザー制度について」、樋口賞:山口県「大学リーグやまぐち」の取組、吉村賞:梅光学院大学「教職協働による学生支援(海外研修編)」がそれぞれ受賞しました。

YU-AP事業の成果発信と情報交流進む!

YU-AP事業では、学内の教育改革だけでなく、AP事業採択校間の情報交流、さらには、我が国の高等教育全体における質保証、高大接続改革に貢献すべく、積極的な情報発信に努めることが重要な使命と考えています。

本学の取組に関心を示し、訪問調査を受ける機会も多く、2014年度以降、国立大学2機関、公立大学2機関、私立大学7機関、さらには日本私立学校振興・共済事業団からの訪問調査を受けています。また、2017年度には、宇都宮大学、宇都工業高等専門学校、全国大学教育研究センター等協議会での基調講演・事例報告の依頼を受けたほか、県内高等学校3校でのアクティブ・ラーニング型授業やループリックによる学修評価に関する研修会講師を務めました。

さらには、高知大学APシンポジウムや大学教育学会課題研究集会でのポスター発表に加え、イギリスの権威ある学会SRHE(Society for Research into Higher Education)のニュースレターにおいて、我が国の高等教育事情として、山口大学・大学教育再生加速プログラムにおけるアクティブ・ラーニング推進や学修成果可視化の取組事例が掲載されました。国内外や学校種を超えて、YU-AP事業の取組の成果発信と情報交流を益々進めていきます。



Editorial Note

【編集後記】

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)は、アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化の促進、そして、教員・職員・学生が協働するFD・SDワークショップを展開しています。最近では、YU-AP推進室からクリッカーやタブレット機器、アクティブ・ラーニング教室の利用促進について発信しています。2015年度以降、授業での利用実績が継続的にあり、クリッカーやタブレット機器を活用した教員・学生双方での意思疎通を通じた授業は、まさにアクティブ・ラーニングのグッド・プラクティスであると言えるでしょう。また、学生間の意見交換を容易にする学修環境として、可動式の机・椅子が導入されているアクティブ・ラーニング教室が有効に活用されています。



今後の山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)が発信する情報やこれまでの取り組みについては、本事業ホームページにて積極的に発信されています。YU-APIに関する最新情報はホームページを是非ご覧ください。URL: <http://www.yuap.oue.yamaguchi-u.ac.jp/>

Staff

【YU-AP 事業推進スタッフ】

- 林 透 (大学教育機構大学教育センター 准教授)
- 篠田 雅人 (大学教育機構大学教育センター 助教(特命))
- 伊藤 千恵美 (学生支援部教育支援課 事務補佐員)
- 矢田 萌佳 (人文学部4年)
- 香川 万由子(経済学部3年)
- 廣本 明日香(人文学部2年)
- 堀井 さやか(人文学部2年)
- 岡 寛範 (経済学部2年)
- 川田 海栄 (経済学部2年)
- 大谷 有紀 (農学部2年)
- 高松 風果 (農学部2年)
- 増田 雅也 (国際総合科学部2年)
- 原 幸乃 (人文学部1年)
- 杉本 寛展 (経済学部1年)
- 大亀 洋輔 (理学部1年)
- 生島 歩 (工学部1年)
- 藤井 聖也 (工学部1年)
- 松瀬 可菜子(農学部1年)
- 谷崎 絵美里(農学部1年)

